

葉の上にいるコノハゴキブリの成虫 (→138ページ)



せわしなく歩くヒメマルゴキブリ属の一種
(→137ページ)



肩車作戦が成功して撮影が叶ったアシナガゴキブリのオス成虫 (→149ページ)



刺激すると丸くなった
ヒメマルゴキブリ属の一種
(→138ページ)

ゴキブリ天国、西表島

まずは、旅を始めるきっかけとなった、ゴキブリとの出会いについてお話ししよう。私のもとと、ゴキブリが大嫌いだ。それが今となってはあらず不思議、「ゴキブリリスト」なんて名乗りながら、ゴキブリについての研究・展示・執筆・講演会などを行なっているのだが、私がこうなったのにはきっかけがある。

私の勤める磐田市竜洋昆虫自然観察公園では年に一回、南西諸島へ昆虫採集の出張がある。私が入社した翌年、沖縄県の西表島に赴くこととなった。飼育の参考にするために生息環境を実際に見ることや、写真の撮影、生体の採集などが目的だ。

私はそれまでさまざまな場所で虫採りを行なってきたが、南の島を訪れるのは初めて。どんな昆虫がいるのかもあまり知らず、まずは下調べすることにした。

クワガタ、チョウ、バッタ、ナナフシなどの昆虫。そして昆虫以外にも、爬虫類や両生類、鳥類、本州では見ることのできない生き物がたくさんいる。行く前からすでに目移りしてしまっただけで、出会いたい生き物たちは数えきれないほどになった。せっかく南の島に行けるのだ。知らずに見過ぎたなんてことは避けたい。できる限り知識を頭に入れて、全力で楽しむ……い



図1-1 西表島の森

やいや、仕事をしなくてはならない。

調べていくうちに、西表島には多種多様なゴキブリが生息していることがわかった。当時、ゴキブリが大の苦手だったため、正直、ゴキブリがたくさんいることを知って、少し腰が引けてしまった。

しかし、まったく興味がないわけではなかった。というのも、この少し前に、上司の北野さんがクロゴキブリ *Periplaneta fuliginosa* (屋内に姿を現す「ザ・ゴキブリ」が本種である) を昆虫館で飼育しはじめ、北野さんが不在のときは私が世話をしていたのだが、エサを与えると寄ってくる姿などを見て、少しかわいいかもしれないと思っていたのだ。

ゴキブリは飼育が難しくないのです、何か



図1-3 手のひらで丸くなるヒメマルゴキブリ



図1-2 幹に静止するヒメマルゴキブリのメス成虫

しら見つけれれば、同行する北野さんに採集してもらおうのも悪くないかと思っていた。

二〇一七年三月。ついに私は西表島に降り立った。

宿に荷物を置き、採集を開始したのは、あたりが真つ暗になってからだだった。

西表島には深い森が広がっている(図1-1)。初めて見る亜熱帯の動植物に感激しながらも、目星をつけていた林道で探索を始める。頭上では鳥が聞きなれない声で鳴き、木の枝には三月だというのに大きなカマキリがぶら下がっている。大興奮である。

次々に魅力的な生き物たちが現れ、暇な

時間がない。地面、落ち葉の下、石の下、ガードレールなど、何かがないか注意深く探索する。すると、木にダンゴムシのような生き物を発見した(図1-2)。

楕円形で、大きさは一センチメートルちょっと。黒くてツヤツヤしている。ダンゴムシのような見た目だが、ダンゴムシはもつとグレーな色合いなので、違う生き物のようだ。

これはもしかや、ヒメマルゴキブリ *Parisphaenus pygmaeus* ではないか？

下調べの際に目にしたゴキブリの名前が浮かぶ。たしか、ダンゴムシのように丸くなることができるゴキブリだ。ゴキブリらしからぬ見た目で、「この種なら触れるかも」と思ったので覚えている。

見た目はほぼダンゴムシである。ゴキブリ

チビゴキブリの卵鞘の謎

天国のような出張

私がゴキブリ好きになったきっかけである石垣島・西表島への出張を皮切りに、竜洋昆虫自然観察公園では年に一度、三月ごろに南西諸島への虫探し出張が定例化した。石垣・西表出張の翌年である二〇一八年は石垣島・与那国島への出張で、私は当然のごとくゴキブリを探した。結果として、未記載種（新種候補）のゴキブリを見つけたことができ、政法大学や鹿児島大学などの先生とともに新種記載の研究を始めていた（詳しくは拙著『ゴキブリ嫌い』だったけどゴキブリ研究はじめました』で紹介している）。

そして、そのまた翌年である二〇一九年三月は、上司である北野さんとともに徳之島、奄美大島へ向かった。

徳之島、奄美大島はともに奄美群島に含まれる島だ。固有の生き物が多く生息しており、有名なところだと、アマミノクロウサギやルリカケスが生息している。ゴキブリもアマミモリゴキブリ *Episymploce amamiensis* やスズキゴキブリ *Periplaneta suzukii* などの魅力的な種が多く生息している。

最初の二日間は徳之島、それから奄美大島に移動して探索を行なった。徳之島はさまざま



図2-2-1 暗い林道で撮影中の著者

生き物に出会うことができたいへん楽しかった。しかし、印象に残ったのは奄美大島だ。

奄美大島の珍ゴキ

私も北野さんも、奄美大島を訪れるのは初めてだった。どんな生き物に出会えるだろうかとワクワクしながら上陸し、荷物を整えて早速生き物探しに出かけた（図2-2-1）。

夜になって、いよいよゴキブリタイムが始まる。昼に見つけていた環境のいい林道で、草木をライトで照らしながら歩いていると、下草の葉上にキチャバナゴキブリ *Centrocolumna japonica* を見つけた（図2-2-2）。

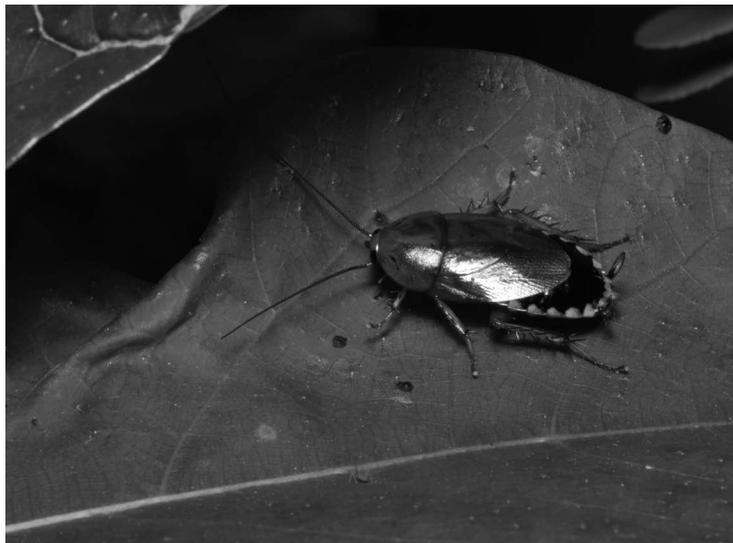


図2-2-2 キチャバネゴキブリ

で、サイズは十五〜二十ミリメートルほど。ずんぐりむっくりした見た目で、非常に愛らしい。今回の遠征で初めて見ることでできたゴキブリであり、夢中で撮影した。林床や葉上に多く、生息地ではかなり個体数が多いようだ。

少し進むと、今度はサツマツチゴキブリ *Mygalea satsunuma* を見つけた(図2-2-3)。八〜十ミリメートルほどの小型のゴキブリで、四国、九州、大隅諸島、トカラ列島、奄美群島、沖縄諸島などに分布している。千葉県でも移入と思われる個体が見つかっている。透明感のある前翅が美しく、繊細なガラス細工のようなゴキブリだ。後翅は鱗片状で、飛翔することはできない。

ところ変わればゴキ変わる。ご当地ゴキ



図2-2-3 葉上のサツマツチゴキブリ

ブリたちに感動しっぱなしだ。

北野さんとともに他にも虫がいなか探しながら歩いていると、後ろから車の音が聞こえた。道の真ん中には邪魔なので端によけると、私たちの近くに来て止まった。

「こんばんは。何を探しているのですか？」

助手席の女性が窓を開けて話しかけてきた。私はなかなかの常識人だ。今自分が夜中の真っ暗な林道で怪しい行動をしている自覚があるので、不審者に思われないうにできる限り「いい人そう」に「こんばんは」と返した。

「虫を探しています」

車の後部座席には、大きな機材を持った

金属と見間違えうほどの輝き・ゴウシュウゴキブリ

魅惑のゴウシュウゴキブリ

オーストラリアの旅も残すところ二日となった。私たちはクイーンズランドのケアンズ空港から出発し、メルボルン空港を経由してパース空港に降り立った(図3-4-1)。パースはケアンズとは対角にある。オーストラリア国内での移動だということに、七時間ほどの長旅である。

そんな遠い地のパースに、わざわざ少ない日程を割いて降り立ったのには理由がある。

ゴウシュウゴキブリ属のゴキブリだ。本属のゴキブリにはさまざまな種がいるが、顔ともいえる種はキンイロゴウシュウゴキブリである。第一の目標はキンイロゴウシュウゴキブリに据えていたが、どの種も見つけにくいようなので、本属のゴキブリに一種でも出会えれば最高である。彼らはオーストラリアでも南西の地域にしか分布していない。どうしても見たかったゴキブリなので、短い旅のなかで無理矢理ではあ



図3-4-1 パースへ移動中の飛行機から見えた景色。雄大な台地が続いている

るが、パースを予定に組み込んだのだ。

パースはケアンズと違って森林はあまりなく、乾燥した砂漠環境が続いているらしい。モトさんも初めての地とのことで、虫探しをできるところから探していくことになる。

到着してレンタカーを借り、とりあえず宿に向かう。宿については二一時。ここでトラブルが起きた。すでに宿が閉まっており、受付の方がいないのだ。掲示されている電話番号にかけるも、応答がない。

これは困った。遠い異国の地で、宿なしである。

しかし慌てても仕方ない。いざとなれば宿の前にある駐車スペースに車を止めて、車内で寝ればいいだろう。右往左往していても時間がもったいないので、とりあえずポイントに向かうことにした。

初日夜のポイントは砂浜である。キンイロゴウシュウゴキブリの目撃情報があるポイントで、他のゴウシュウゴキブリ属が見つかってもおかしくない。

ポイントに着いて早速ヘッドライトを装着。探索を開始する。ヨロイモグラゴキブリで気をよくしていたこともあって、「すぐに見つかってしまったりして」なんて思いながらの探索だ。上翅にトゲのようなものが生えたヘンテコなゴミムシダマシ(図3-4-2)、目がまっ黄色のヤモリ(図3-4-3)など、さまざまな生き物が目に入る。同じ国とはいえ、かなり距離が離れていて



図3-4-4 *Pseudonaja affinis*。現地ではドゥーガイトと呼ばれる猛毒のヘビである

環境も違うため、ケアンズとは生き物の相
 がまったく違う。
 楽しみつつ本命のゴウシユウゴキブリ属
 を探すのが、なかなか見つからない。砂浜に
 ある草むらが怪しいなと思い、ガサガサと
 踏み込んでいく。驚いて出てこないだろう
 かと目を凝らしていると、あと一歩先のと
 ころに、ヘビを見つけた(図3-4-4)。草の
 間から体が見える。オリーブ色をした地味
 な見た目だ。オーストラリアは毒ヘビが多
 く、こういった地味な体色の毒ヘビも多
 いる。気づかずにあと一歩踏み出しては
 ら危なかっただろう。
 写真を数枚撮影して、木の枝でつつくと、
 ゆっくりと消えていった。不用意に草むら
 に入らないほうがよさそうだ。近くをよく



図3-4-2 ヘンテコなゴミシダマシの一種



図3-4-3 まっ黄色の目をしたスピニゲルスイシヤモリ *Strophurus spinigerus*

番外編③ 「ゴキブリ」の由来を求めて

ゴキブリという名前

ゴキブリはしばしば、「名前が気持ち悪い」と言われてしまう。たしかに、濁音が二つも入った昆虫なんてあまりおらず、なんだかワサワサしたイメージがある。これが「コキフリ」だったとしたら、イメージもだいぶ変わっていたことだろう。今となっては、いつも眼鏡をかけている人が急に裸眼になったような「何か足りなさ」を感じてしまうが、「ゴキブリ」はそれくらい慣れ親しんだ名前ということだろう。



図Ⅲ-1 御器

そもそも、ゴキブリはなぜ「ゴキブリ」という名前になったのだろうか。安富（二九九二）によると、「御器被り（ごきかぶり）」という名前が転じて「ゴキブリ」となったという。御器というのは図Ⅲ-1のような蓋つきのお椀のことをいう。これにあった残り物でも食べていたのか、被るようになっていた虫を我々が慣れ親しんだ「ゴキブリ」という呼称になったのだ。

「カ」消失の原因となったのは、一八八四年発行の日本初の生物学用語集『生物学語彙』だ。この本では、今でいう「ゴキブリ」が二度登場するのだが、片方を「ゴキカブリ」とし、もう片方を「ゴキブリ」としてしまい、その後の本でも「ゴキブリ」が使われることで定着したという。当時は活版印刷だったため、ハンコのようなものを一つ一つはめ込んで印刷していた。その際、「カ」を入れ忘れてしまったのではないかとされている。この、ゴキブリがゴキブリとなった瞬間をどうしても見たくて、私は『生物学語彙』を探すことにした。

「コキブリ」のはじまり

まず手始めに、古書店のウェブサイトや古書の横断検索サイト、ヤフオク、メルカリなど、思いつく限りの古書を扱う販売サイトをぐるぐると回ってみたが、過去に販売された形跡すら見当たらない。『生物学語彙』は一八八四年に初版のみ発行された書籍で、そうやすやすと手

に入るものではないのはわかっていた。しかし、あまりにも何の手掛かりも得られないゆえに「現存しているのか？」という疑いさえもつてしまう。

ただ、収穫がまったくなかったわけではない。国立国会図書館のウェブサイトに、『生物學語彙』のPDFが公開されているのを見つけたのだ。早速ダウンロードして中を見てみるとにした。ゴキブリが載っているページを探していくと……あった。「Bate」の訳に「蜚蠊属（こきかぶりぞく）」とある。これが一つ目の掲載箇所のようなのだ。引き続き、二つ目を探していくと、見つけた！「Cockroach」の訳として「蜚蠊（こきぶり）」とある！一か所目と同じ漢字にもかかわらず、二か所目では「か」の文字がない。これがのちに名を馳せることになる「ゴキブリ」の誕生だ。

望み通り「ゴキカブリ」から「ゴキブリ」呼びに変化した原因を見ることができて多少興奮した。しかし、何か足りない。

私は、マンガなどは電子書籍で読むことが多いが、エッセイや小説、図鑑などは紙の本派だ。ペラペラとめくるあの感覚を感じていたいし、部屋に積んでおくだけで賢くなれる気がするからだ。そんな私が、PDFデータで満足できるはずがない。これでは賢くなれないのだ。実物を見て、「これがゴキブリの誕生だ！」と叫びたい。

やはり、どうにかして実物を手に入れられないだろうか。粘り強くネットの海を泳ぎつづけたが、ついで宝の島に行くことはできなかった。それから足を使って古書店を探すも、自宅のある静岡の書店にも東京の書店にも、影はなかった。

ある日、こうなったらSNSで情報提供を呼びかけてみようと思いついた。今は気軽に多くの方と繋がることのできる時代。それゆえに危険なことや危ない人と繋がってしまうこともあるが、情報提供の呼びかけなどを行ないたい場合は便利である。

早速、Twitterで『生物學語彙』についての情報提供を呼びかけた。すると数名から、もしかしたらここに在庫があるかもしれないという書店を教えてくださいました。早速、在庫確認のメールを一軒ずつ送ることにした。まず一軒目。在庫なし。まあ予想通りだ。二軒目。なし。まあまあまあそうだろう。三軒目。なし。そろそろ心がつらくなってきた。四軒目。なし。もうだめかもしれない。

諦めるな！と自分に鞭を打って五軒目に連絡。すると、「以前は在庫がありました。たしか売れたと思います。もし在庫があったり、入荷したら連絡します」との返答だった。なんと！今までで一番惜しいところまで来た！ようやく影を見ることはできたが、やはり一筋縄ではいかないようだ。もし在庫があった場合や入荷した場合は連絡していただけるよう

ゴキブリ旅の持ち物

服は最小限、機材で荷物が重い

「島や海外へ出かけるとき、どんなものを持っていくのですか？」

ゴキブリ探索旅の話を講演会などですると、こういった質問を受けることが多い。生き物を採集する人の持ち物は、普通の旅行者よりも多くなる傾向があるのではないかと思う。採集する人は採集道具やケース類がかさばるし、撮影する人はあれやこれやと撮影機材を持っていく。逆に、服は最小限に留めることが多い。

生き物好きといっても、対象とする生き物や、その生き物との関わり方によって、持っているものはさまざまだ。ここでは、ゴキブリ屋の私が遠征時に持っていくものを紹介する。

【服装】

野外で虫を採集する際は、服装に気をつける必要がある。草で擦ったり、虫に刺されたりすることがないように、基本的には長袖長ズボンを着用する。私はゴキブリを見つけたときにすぐにケースを取り出せるよう、ズボンのポケットにケースをいくつか入れておくので、ファスナーつ

きの大型ポケットがついたズボンが便利で重宝している。悪路やがけを登る際も、ファスナーを閉めておけばケースを落とすことがない。

靴はグリップの効く登山靴を履き、場所によっては長靴に履き替えて対応している。基本的に夜間に動くことが多いので、帽子はあまり被らないが、真夏の昼に調査する場合などは着用する。また、寒さや雨から身を守るために、小さく収納できるウィンドブレーカーなどを持ち歩き、いつでも着られるようにしている。



【採集道具】

一番重要なのが採集道具だ。海外遠征の場合は持っていかないことが多い（採集ができないことが多い）。許可がとれている場合は持っていくこともあるが、国内への遠征時は必ず持っていく。最初に用意するほど、重要な持ち物である。ここからはリスト形式で紹介したい。